

研 修 名 支援を必要とする子どもの保育

令和元年8月5日（月） 10:00～12:30

講 演 「障がい児保育における個々の発達を促す生活と遊びの環境」
「障がいのある子どもと保育者の関わり」

講 師 京都文教短期大学 幼児教育学科

准教授 張 貞京 氏

1. 講演要旨

「実行して継続可能な改善をしないと意味がない。継続できるのか考えて取り入れていく」

1) 生活と遊びの基盤となる環境

- ・障がいのある子どもへの援助が周りの子どもも助けていくことがよくある。
- ・気が散るからといって何でも片付ければいいのではない。
- ・クラスの子どものに合った玩具やコーナーを用意する。
- ・大人目線の環境になっていないか、確認をくり返す。

2) 遊びを通した学び

- ・子どもが自分から選び、自分で納得して取り組める生活が求められている。
- ・遊び……ガイドされた遊びが最も子どもの発達を促すと言われている。
保育士が遊びを広げてあげられることが大切。気付きを広げていけるヒントをあげる。「こんなものもあるよ」「こういうやり方」など。
子どもの姿に合わせて意図的に用意する。
- ・子どもに何を学んでほしいかを考えて、遊具などを選び、与える。
 - その時の子どもの姿や気付きでわかるので、後からわかることも多い。
子どもも遊びを振り返り、後から気付くこともある。数年後に気付くこともある。

3) 特別支援教育に位置付けられている遊びの指導

- ・身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れるようにすること。
今の子どもは体を動かすことが下手である。全身を使い“遊んだ”という実感がもてる遊びがいい。
- ・大人が率先して一緒に遊ぶことが大切である。

4) 障がいのある子どもの発達を促す環境

- ・障がいを理解し、発達を促すためには発達の道すじへの理解が基礎である。
その場面の姿だけでなく、遊びや生活全てがつながっているなので、その力がどこにつながるのか考え援助していく。
- ・生活リズムを整え、身辺動作ができるようにする環境……生活の乱れから集中力がなくなる。
- ・1人遊びが主であっても、他児に関心をもてる環境が大切である。
 - 集団遊びとの関係性を考える・参加できそうな機会と手掛かりを用意する。
最初から最後まで参加するのはしんどい。
遊び込むより、短い時間の参加を積み重ねることで気付きがある。

〈理由〉

- ・環境として何が当たり前なのか、心地良いのか子どもには分からない。
大人が気付くことが必要である。
- ・家庭生活での空間、時間、人的環境との付き合い方が大変下手である。
大人に聞けばいいのに聞きに行けない。聞くことに気付けない。指摘ばかりが多くなってしまう。

5) 今の環境を見直す。子どもがその場にとどまれない理由は何か考える。

〈 仮説を立てる 〉

〈 第三者視点を活用する 〉

- ・空間的見直し・・・今ある空間で動かせるものは？ひき算できるものは？
保育所全体の空間として利用できるものは？
- ・保育の流れの見直し・・・気になる子どもは遊びにくるのが他の子どもよりも遅れる。
終わるのも遅い。その時間を考えて保育の流れを考える。
- ・伝達は明確か・・・2語までが伝わりやすい。最初に結論を言う。「暑いからお茶を飲む」など。
伝えたかではなく伝わっているかを確認する。(保護者でも同じ)
「何回も言った」→聞いていない。体に触れたり名前を呼んだり、その子どもにとって伝わる方法を考える。
- ・物的環境の見直し

6) 担任保育士としての関わり

- ・客観的な視点で子どもを見るように努める

〈 観察記録を取る 〉

- ・・・テーマや時間帯を決める。砂場やプールでの姿、午睡前の10分など決めて毎日見ていくといい。周りの保育士と連携しないとできない。
- ・安心できる大人として、集団生活を送る上での安全基地となる。
トラブルは子どもがそれだけ求めているからである。
→他の子どもとの関わりをもち、困った時に戻ってこられる場所。
- ・環境を整備し、働き掛け、子ども自身の変化を観察しながら待つ。
→目で見ているなどしている。物一つの置き方でも少し近くするだけで違う。
- ・保育者が発する言葉の影響に気づく
→保育者の言葉は人数分に伝わり、周りの子どもも同じようにその子どもに言う。
プラス面で使うとそれが広がっていくので、うまく使うといい。
- ・子ども自身が気づいていない思い、願いに気づき、より良い姿になれるように援助できる存在となる。
- ・今の関わり、認識を見直す
ボディイメージがとりにくい子ども
・・・目を閉じて体のどこを触ったか当てさせるゲームをするといい。最初はわかりやすく、そしてそーっと触る。体を意識することで落ち着かない子どもも落ち着く。
その子どもの動きを制止する時
・・・その子どもの得るべき経験ができていない、遊びに誘っていない。
他の場面で遊びが広がるように関わる。
その子どもの名前を呼んでいるか見直す。名前を呼んでいないのは声をかけられていないから。
二つ以上を意識することが苦手である。「〇〇しながら△△する」は大変難しく、「〇〇したら△△になる」も意識しにくいことが多い。
理由や背景によって解決策が変わる。わからないと、その子どもを望ましい姿に導くことはできない。

7) 障がいのある子どもにとって他児とは

- ・大人に比べ、予測のつかない存在でもあり、気になる存在でもある。
- ・大人に比べ、手が届きそうで真似しても良さそうな存在でもある。

8) 他の子どもとの関わり

- ・他児とのトラブルが起きない子どもにも目を向ける
 - ・・・不登校になる子どもに多い。就学後に友達に興味が生じるが関わり方がわからない。
- ・力関係が作られていないか観察しておく
 - ・・・遊んでいるように見えて言いなりになっていないか。
- ・仲良くなる
 - ・・・ケンカをしてたくさんぶつかって仲良くなる。子どもはトラブルがあることで学ぶ。人との気持ちが結ばれないとトラブルは止められない。
- ・わからないことをわからせるのは、体感しないと共感できない。

9) 他職種との関わり

- ・全員で保育していく必要がある。
- ・自分のワザを伝授する視点をもつ。他の人から学ぶことがたくさんある。

2. 感想

障がいのある子どもにとっての過ごしやすい環境や関わりについて学ぶことができ、改めて、今までやってきたことの大切さに気付いたり、自分では思いつかなかった様々な子どもの姿の捉え方を知ったりすることができました。実行して継続可能な改善をしないと意味がない。継続できるのか考えて取り入れていく」いう話では、自分の中にすっと入り、今後、自分なりにいろいろと援助や環境の工夫を考えていく上で、しっかりと意識していきたいと思います。

また研修の中でも、今すぐに取り入れられることを多く学ぶことができたので、自分の保育に、早速活かしていきたいと思います。

ワークでは様々な考えを聞くことができ、職場でも一人だけやクラスの担任間だけで考えるのではなく、職場全体で話し合うことが本当に大切だと感じる事ができました。目の前にいる子どもにとって、よりよい環境や関わりができるよう自分から率先して機会をつくっていければと思います。ありがとうございました。

(記録：京丹波町立みずほ保育所 兵田 尚美)